



第2回山岳自然環境セミナー
続 「山の自然が崩壊する、
深刻化するニホンジカの被害」が開催されました

木の目草の芽

2018年4月9日
公益社団法人
日本山岳会
自然保護委員会
TEL:03-3261-4433

年間購読料1,000円
申込: 047-463-8721
syuaki@pony.ocn.ne.jp
郵便番号00180-4-710688
加入者名: 川口章子

3月11日（土）、国立オリンピック記念青少年総合センターにて第2回山岳自然環境セミナーが開催されました。山岳団体自然環境連絡会（日本山岳会を含む山岳7団体）主催、環境省と日本自然保護協会の後援により、昨年に引き続きニホンジカ被害の情報共有と、対策に向けての意見交換が行われました。

今年の基調講演は、「ヨーロッパ狩猟の過去と現在」と題して駒澤大学名誉教授の野島利彰氏よりお話しいただきました。ドイツやフランスで権力の象徴として長年続いてきた狩猟は、王侯貴族に仕える狩猟職業集団が存在し、その地域の野生動物の数や生息場所を常に把握していたそうです。また狩猟のノウハウが解説書として詳しくまとめ

第132号 〈目次〉	
P.1	第2回山岳環境セミナー が開催されました
P.2	〈パネリストからの報告〉 岡 輝樹・瀬戸 静恵 浅野 能昭
P.6	茅野亨氏 講演会報告 「アラスカ大自然の生活と環境」 小泉 義彦・下野 武志
P.8	木曾駒ヶ岳10年間の 植生変化の動向 下野 綾子
P.10	連載コラム 「ライチョウといつまでも」 日吉 健治
P.11	携帯トイレのすすめ 自然保護委員会からの提言

今回の基調講演は、ヨーロッパにおける過去の狩猟が焦点ではありましたが、こうした海外の歴史や文献をさらに掘り下げることで、あるいは現在の私たちにとっても有用な方法や知恵を見出せるかもしれませんと感じました。

基調講演に統いて、3名のパネリストの方々が現場からの報告をしてくださいました。次にその要約を紹介させていただきます。

第2回山岳自然環境セミナー パネリストからの報告（要約）

◆岡 輝樹（おかてるき）氏

国立研究開発法人 森林研究・整備機構

森林総合研究所 野生動物研究領域長

『シカの生態と目撃情報の収集について』

ニホンジカの学名 (*Cervus nippon*) にはニッポンと入っていますが固有種というわけではありません。大陸にも生息しますしエゾシカもヤクシカも同じ仲間です。これが更にヨーロッパやニュージーランドなどに食肉として持ち込まれて次々に増えて手がつけられなくなり、外来種として悪名を高めてしまっています。

我が国の農業被害はシカによるものが最も多く、被害総額は約 65 億円。林業被害は公に発表されていませんが、私が計算したところでは 80 億円前後にもなります。

全国のシカ頭数の推移を見て行くと、右肩上がりに増えつつあります。この先のおよその計算をすると 2040 年にはほぼ日本中に分布域が広がります。早ければ 2025 年には広がってしまうかもしれません。正確に言え、かつての分布域に戻っているところで

す。昔は色々な場所にいましたが、人の圧力で生息域が小さくなっていたのです。

増えてきた理由は、一つには冬の寒さが厳しくなくなつたという話もありますが、それよりもやはり人とシカとのバランスが崩れたことが大きいと思います。獵友会の人たちが減つたことや、耕作放棄地が増えたことです。

全国で年間 28 万 ha くらいの放棄地が増えています。一方でシカは 8~9 割のメスがほぼ毎年子供を産みます。そういう状況に対しても人間の圧力は全く及ばなかつたわけです。さらに政策の遅れもありました。シカの数が減つたために明治時代に雌ジカを禁猟としてそれが解かれたのが 2007 年、その間メスは全く獲られることがありませんでした。

植生への影響の現れ方としては、一見、何もない状態になつてしまいますが、シカの首が届く、高さ 2 メートルまではほとんど緑が消えています。急傾斜地で下草を食われると斜面崩壊を起こすこともあります。そこで環境省は捕獲率を 2・2 倍くらいにして 10 年後には頭数を半分にしたいと目標を立てています。例えば認定鳥獣捕獲等事業者制度があります。ハンター以外の人たちも加わってもらいます。ハンター以外の人たちも加わってもらえば、かつての分布域に戻っているところで

だ問題は、一体どこで捕獲をすれば効率よく捕まるのかということがわかつていないので、そこを解決していかなければなりません。

今日紹介させていただくのは、我々が行つ

ている農林水産省の委託プロジェクト（「農林水産分野における気候変動対応のための研究開発」における「野生鳥獣拡大に係る気候変動等の影響評価」）です。これまでの分布拡大状況を振り返つてモデルを構築し、気候変動に伴う自然・社会環境の予測シナリオを重ねて未来のニホンジカ分布と被害を予測しようとしていますが、シカが現在どこにいるのかを把握する必要があります。カメラを設置したり痕跡を探したりという作業を地道に続けていますが、同時に目撃情報や被害状況などを集めていこうとしています。そのためには「シカ情報マップ」というものを作り情報提供をお願いしているところです。集めた目撃情報は予測のために利用していくますが、獵友会や市町村なども、どこでシカを捕らえれば効率的なのかという判断を、この地図を見ながら進めていく様に情報を残しておきます。こうした情報を使って、地域ぐるみの取り組みができる良好だと考えています。

シカ情報マップは、スマホを使って QR コ

一ドから「シカの目撃情報」をクリックすると地図上に現在地が出ます。時間も入っていきます。そこにシカの頭数を入れて送信すると情報がサーバーの方に送られます。トップページに戻るとシカ情報マップ閲覧ができますので、ぜひそこも見てください。このシステムは色々なところで注目されていまして、他の動物でも使えるのではないであります。ぜひご協力をお願いします。





◆瀬戸 静恵（せと しづえ）氏

一般財団法人 自然公園財団 日光支部主任

霧降高原のシカ対策、現場からの報告

私の所属している自然公園財団は、主に公園

施設の管理事業を行つてゐる団体です。今日は日光市の霧降高原にあるキスゲ平園地の事例を紹介します。

私たちの財団は、平成25年のリニューアルの年に指定管理者として入っています。名前の通り、ニッコウキスゲが有名になつていて、が、カタクリやツツジなども綺麗に咲き、高原らしい風景を8月の終わり頃までは楽し

むことができます。そのキスゲ平園地は昭和の終わりから平成はじめにかけて、ニホンジカによつてニッコウキスゲの壊滅状態を経験

が、これは栃木県内では早い方でした。

現在はかつてのニッコウキスゲの壊滅状態を踏まえて徹底的な補植と保護を続けています。柵の設置は一定の効果はあり植生もか

なり回復しています。シカを柵内に入れないと、
ように徹底してはいますが万が一入ってしま
つた場合は、とにかくキスケを食わせないた
めに様々な工夫をしています。雪で壊れた柵

から春先にシカが入り込んでしまうので、まずはそのシカを追い出してから柵を直すとい

う、シカ追い出し作戦イベントを行っています。内容もわかりやすいので人気のあるイベ

ントとなっています。またニッセイキヌケの
補植は6月と10月にキスゲの少ない場所に
直して下さい。もう一つ、大葉ゴマフア、

相手であります。このイヘンリは歴史もありま
近隣の住民の皆さんとの交流の意味もあります。

す。ただ柵はシカの侵入を100%防ぐものではありません。植生に影響を与えないであろうと思われる個体数は1 kmあたり1頭以下と言われていますが、10 haのキスゲ平園地に1頭入った場合で計算すると、1 kmにだい

たい 10 頭いるという計算になつてしまふの
で、本当に大きな被害を受けることになりま
す。

我々にとつてはシカが1頭でもいるという

ことは緊急事態ですので、シカを減らすことよりも、まずはキスゲを守ることにしています。補植した苗を守るためにあらゆる思いつ

くことはその日のうちにやってしまいま
す。たとえばナイロンの網をキスゲの苗の上にかけ
てみましたが、上を歩いて苗を食べられてし

まいました。そこで蹄に引っかかるような金網を設置すると、首が苗に届いてしまうと食

われますが、面積を広げて設置すると効果はあるかなと思っています。また地面から少し

高さを出して網をかけてみると、シカが狙う様子はあるのですが効果がありました。

最終的にはキスクを守らなければいけないので、私たちも園内に罠を仕掛けることが出来ない。ハツビトキヌカサナベニヒツジ、千

あります。いっても捕獲だけはできるよ」と、柵可申請を出して準備だけは整えていました。

に絡まってしまうシカもいますので、ただ囲えば良いということではなく、柵を管理するシステムがセットでなくては残念な結果を生み出します。その責任は私たちにあります。常に人の目がある、という公

園管理が求められると思います。

日光市の場合、捕獲したら小さくバラしてビニール袋に詰めて処理場まで持つて行かなければなりません。これは大変な作業ですの

でキスゲ平ではシカが捕まつても、基本的に柵の外に逃す方針でいます。捕獲するとい

うのは最終手段です。個体数調整にも同じような問題があります。猟友会や行政の方、ボランティアの方々にお願いして、捕獲したシ

カを集めて計測し、年齢や妊娠の有無や栄養状態など様々なモニタリングを実施しますが、シカは大きいのでこれも大変な作業です。そ

してその後の死体はやはり焼却場に持つていくためにバラバラにしなければならなりません。そういう問題は日本全国で起きている

と思われます。シカによる食害の問題を考えれば、個体数調整もとても大事ですが、山岳地

域のお花を守りたいのであれば、植生の保護も同時に進めなければならないと、現場を見ていて思います。

キスゲ平では見た目の植生は回復していま

すが、絶滅している動物などもいます。例えば奥日光では笛敷が一次的になくなってしまつた影響で鶯の声がほとんど聞かれなくなつたとも言われています。また、最近ではシカ

の話よりもヤマビルが話題になっています。

日光市内はヤマビルが増えてしまつて山道だけではなく自宅周辺でも歩いていると、くつづいて吸血します。ヤマビルの問題はやは

りシカの増加から連鎖した新しい問題と考えられますので、シカの生息地である自然系の観光地では、このヤマビルの問題はとても大きなものになってくるのではないかと予想しています。

キスゲ平のようなシカ対策は、一見消極的に見えるかもしれませんが、狩猟が困難な地域、急峻な山岳地域、観光客が多い場所、もしくはシカの季節移動で狩猟期にシカがいなくなる場合には、やはりまずはその地域の植物を保護するということが重要だと思います。

現状として私たちの公園も夜は人がいませんが、理想は小さな里山のような公園管理ではないかと思います。おそらく全国にキスゲ平と同じような狩猟不適切な地域がたくさんあると思います。そういう条件の地域には管理人を配置して守ることが大事だと思います。

個体数調整が難しい地域での新しい対策のひとつとして考えてもよい事例ではないかと思ひ紹介させていただきました。

◆浅野能昭（あさの よしあき）氏

一般社団法人大日本猟友会専務理事
『狩猟者育成の取り組み』

環境省本省や国立公園の現場で仕事をしていましたが既に退職し、ご縁あって3年前から大日本猟友会で働いております。その前は岐阜県のトヨタ白川郷自然学校に4年ほどおりました。

最近はクマの出没が大変増えていまして、その度に猟友会に声がかかります。オレンジ色のベストを着た方々が出動して、クマの駆除に当たるといったことがよく報道されていますが、猟友会は各都道府県にあり、狩猟者個人はその都道府県猟友会に所属します。そして都道府県猟友会が大日本猟友会の会員となっていますので全国組織になります。

現在の会員は約10万5千人。ピーク時のニッコウキスゲを見せる公園を維持するためにしっかりと柵で囲って管理人も配置して営業しているキスゲ平スタイルというのは、全國でシカによる植物への対処が急がれる中で、

ンスが取れていたのが、最近は新しい参入者がほとんどいなかつたこともあり、60歳以上の方方が3分の2を占めていて高齢化している状態です。一方で女性は最近増えて160人くらい、それでも全体の約1・5%ですからまだまだ少数です。

獵友会の獲る動物も大きく変化してきています。以前はコジユケイやキジバトなど鳥類が多く獲られていましたが、近年はシカやイノシシ、クマ、そしてニホンザルなども有害駆除での捕獲が増えつつあります。

義務ではないので全員が獵友会に入るというわけではありませんが、いろいろなことを先輩から教えてもらえるメリットはありますので、狩猟者の約7割が獵友会の会員になっています。会員が減つたとはいえ、10万人を超えていて、我が国最大の環境NGOという位置付けになるのではないかと私は最近力説しています。助成金なども一切受けず、主に会員からの会費によって運営している稀有な団体です。

大日本獵友会の役割としては、狩猟者の事故防止、狩猟免許取得のための講習会等のお手伝い、銃刀の所持許可、都道府県への狩猟登録など各種手続きの支援等を行なっています。

す。また近年は獵友会が市町村から委託を受けて有害鳥獣駆除を行うことが非常に多くなっています。ハンターの育成についても自治体と協力して進めています。

狩猟者のピークは昭和53年で45万人いたと申し上げましたが、ほとんどが当時はハンター、つまり銃を使う方でした。罠とか網を使う方はあまりいませんでした。統計資料を見ると、昭和50年には網・罠の免許保持者は1万人にも満たなかつたのが、今では9万人を超えてます。一方、第一種銃猟の免許所持者については昭和50年では約50万人だったのが、今では10万人程度に減っています。獵友会で独自に集計したところ、平成27年には罠の免許所持者が銃の免許所持者を上回っています。

特に銃の所持許可を警察から取得するのはハードルが高いので、取得しやすくなるようになっています。ハンターの育成についても自治体と協力して進めています。

狩猟者のピークは昭和53年で45万人いたと申し上げましたが、ほとんどが当時はハンター、つまり銃を使う方でした。罠とか網を使う方はあまりいませんでした。統計資料を見ると、昭和50年には網・罠の免許保持者は1万人にも満たなかつたのが、今では9万人を超えてます。一方、第一種銃猟の免許所持者については昭和50年では約50万人だったのが、今では10万人程度に減っています。獵友会で独自に集計したところ、平成27年には罠の免許所持者が銃の免許所持者を上回っています。

更に若い女性のハンターを増やそうと、「目指せ！狩りガール」という取り組みも行っているところです。ホームページや本などでも紹介していますので、ぜひ見ていただけたらと思います。おかげさまで最近では女性の方にも大変熱心に参加していただいています。獲物をさばくというのは意外と女性の方が得意で、男性に混ざって女性が参加してくれていますが、まだまだこの取り組みは不十分です。今後の課題として女性ハンターを増やすことで、若い男性にも参加してもらおうという狙いです。

大学や専門学校などと連携して人材育成を行いたいとも思っています。ハンターの地位の向上も重要です。最近は有害駆除という面から、社会貢献の意味合いの強さもアピールしていきたいと思っています。

取得の推進として講習会を開催していますが、

委員会主催講演会報告

「アラスカ大自然の生活と環境」

講師 茅野 亨氏 (ちの とおる)

アラスカ・デナリ州立公園在住12年

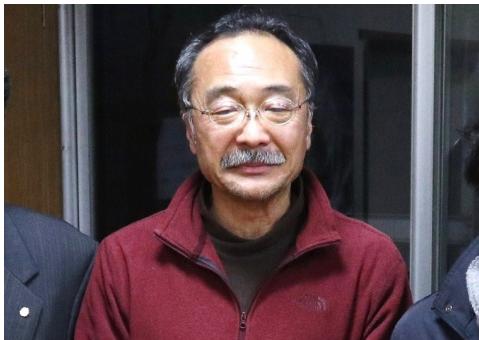
米国 pacific rim service 社代表取締役社長

北海道大学北米大使

平成30年1月31日(水) PM6:30~8:30
日本山岳会自然保護委員会主催 出席30名

先ず前日本山岳会会長の森武昭氏による挨拶、茅野氏のご紹介をいただき、森氏も以前この山荘を訪れたこともありました。

武昭氏による挨
き、森氏も以前
この山荘を訪
れたこともあ
ることが紹介
された。最初に
映し出された
写真は、わが家
(山荘)からよ
く見えるデナ
リを真正面に
して美しく咲
き乱れるヤナ



入し、活動拠点として小さなログハウスを建て、自然エネルギー実験施設としてデナリ・チノ・ネイチャ・センターを立ち上げた。アラスカ大自然の何もない所に、森を開拓し道路をつくり、太陽光、風力、水力などの再生エネルギーを活用しながら、一般の人を泊めるライセンスも取り一応の設備が完成した。200枚近くの写真を写しながら淡々とアラスカの生活、DCNCプロジェクトの紹介、北米、アジア諸国での様々な活動の説明の後、生活基地の様子——野外の風呂や、基地の近くに現われるムース、カリブ、オオカミ、熊などの野生動物の様子、アラスカに特有の木々

国立公園内の
この地に東京
ドーム 14 個

や花々、美しいオーロラ、山々の紅葉などの光景がとてもきれいだった。これらの光景は毎日見ていても飽きないとのこと。

講演の中で最も印象的だったのは、基地を訪れる若者との交流やトイレの問題であった。北海道大学をはじめ世界中の大学から多くの研修生をインターナーシップとして受け入れるとともに、こうした仲間たちと自然保護活動

や花々、美しいオーロラ、山々の紅葉などの光景がとてもきれいだつた。これらの光景は毎日見ていても飽きないとのこと。



ご挨拶と講師紹介をする森前会長



茅野氏の山荘近くから見るデナリ

にも積極的に取り組んでいることは高く評価できる。なかでも山のトイレ問題については世界の最先端を目指している。デナリ登山には毎年1400人が訪れるが、トイレは各自持ち帰りのルールが確立されている。これに引きかえ富士山には毎年27万人の登山者が訪れるが、トイレ問題はまったく未解決のままである。

講演は茅野夫妻がデナリを背景に「大自然に感謝」と高く両手をあげている画面で終了する。アラスカの大自然が身近に感じられるようになつたこと、ここにも自然保護の諸問題とその解決への取り組みの必要性を痛感し、あらためて茅野氏夫妻のエネルギーッシュな取り組みを高く評価したい。

講演会の終了後、反省会を「什番」で実施し、牧野昭蔵さん（北海道支部）、森さん、西田さん、渡邊（嘉）さん、佐藤（登）さん等9名のご参加をいただいて賑やかに和やかに有意義な会をもつことができました。

報告者：小泉義彦（緑爽会）

下野武志（自然保護委員）



アラスカの「大自然に感謝」（茅野氏御夫妻）



山莊から見るオーロラ



講演を聞く参加者（日本山岳会ルームにて）

木曽駒ヶ岳十年間の植生変化の動向

報告 下野 綾子

極地である高山帯は、温暖化の影響が最も出やすい生態系の一つだとされている。実際に世界各地で植生の変化あるいは動植物の分布標高の上昇等が報告されるようになった。例えば世界の樹木限界の位置を調べた研究では、一六六ヶ所のうち半数以上の八七ヶ所で樹木限界が高標高あるいは高緯度方向に前進していることが示された。ヨーロッパアルプスの高山域の山頂では植物種数が増加傾向にあり、近年の温暖化による各種の分布標高の上昇が一因とされている。日本においても、青森県の八甲田山ではオオシラビソの分布が高標高側へシフトしている可能性が示唆されている。北海道の大雪山ではササの拡大が進行しており、積雪量の減少に伴う乾燥化が一因と考えられている。

今後、温暖化に伴う環境条件の変化や低標高を生育地とする種の侵入が進行すれば、互いに隔離し、ごく限られた面積を生育地とする高山植生は衰退する可能性が大きい。加えて、近年はニホンジカの高山帯侵出による食圧が、高山植生の衰退に拍車をかけるのではないかと懸念されている。

生態系変化の実態把握のためのモニタリングは、環境省生物多様性センターの長期生態系モニタリングプロジェクト（モニタリングサイト一〇〇〇）を始めとして、各地で進めている。しかしながら、高山域のモニタリングサイトはごく限られている。植生変化が急速に進行している現状を鑑みると、立地環境、生物相、遺伝的組成など地域性に富む山岳生態系においては山域単位での監視体制の確立が望まれる。

こうした現状から、NPO法人山の自然学クラブでは二〇〇八年に高山植生のモニタリングを中心アルプス木曽駒ヶ岳で開始した。本報告ではこの十年間の植生変化の動向について簡単に報告する。

調査は本州の中央に位置する木曽山脈（中央アルプス）の駒ヶ岳周辺の標高二七〇〇～二九〇〇メートルで行っている。調査地から一kmの距離に位置する千畳敷（標高二六三〇メートル）の年平均気温は約零度である（二〇〇七年～二〇一五年の平均値・信州大学鈴木啓助教授の気水圏研究室の観測）。最寄りの伊那観測所（標高六三三メートル）における年平均気温を調べてみると、調査期間の二〇〇八年～二〇一七年は平年より気温が高い傾向があった（図2）。

植生の異なる六地点に三八個の調査区を設置し、各サイトの地表面温度を一時間おきに記録している。地温を測定することによって雪解け時期を知り、生育開始日を推定することができるためだ。この十年の間では、生育開始は二〇一五年および二〇一六年で早かつた。特に二〇一六年は本州の山岳全域で融雪が早い年でもあった。平年より一ヶ月近く生育開始日が早まった場所も存在した。千畳

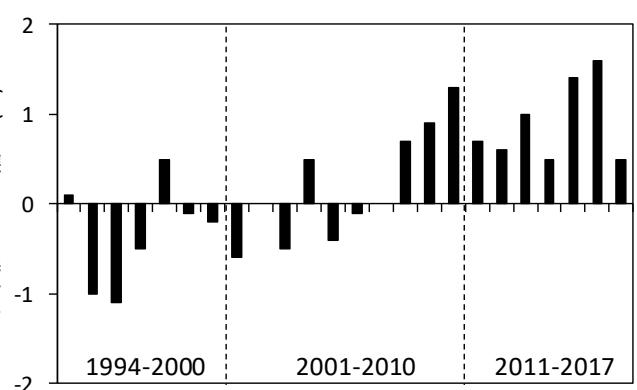


図1 伊那観測所における年平均気温の平年値（1993-2010）からの偏差。1993年から観測が開始されたため、平年値が18年分から算出されている。

敷に設置されている定点カメラの映像を見比べると年の違いが一目瞭然である（図2）。

植生調査は各調査区に一ヶ四方の方形区を四つ設置し、さらに○・△・×の四方の小方形区に区分し、各小方形区に出現する植物の種名を記録した。この百個の小方形区における各種の出現回数を足し合わせた値を総出現数とした。

各方形区の種数は十年の間に変化は見られなかつた一方、各方形区の総出現数は増加



図2. 中央アルプスの千畳敷極楽平で撮影された定点カメラの映像（国立環境研究所の地球環境研究センターのホームページより）。

木曽駒が岳では、この十年の間で、各種の出現数（被度）が増加傾向にあることが明らかとなつたが、今後種数の変化（競争に強い種

傾向にあつた。出現数の増加と相応して、植被率の顕著な増加が認められた方形区もあつた（図3）。図3に示した方形区では矮性低木のガンコウランが特に増加しているが、その他には低木のハイマツが増加した方形区も存在した。概して顕著な増加傾向が見られたのは矮性低木や低木であった。

北海道の大雪山五色ヶ原でもハイマツが拡大しているほか、高緯度地域の各地のツンドラ植生においても低木種が増加していると報告されている。植生高の低い高山植生において、ハイマツは被陰効果が大きいことから、ハイマツの被度や高さが増すと種多様性が減少する傾向が報告されている。ただし、ハイマツの増加量は方形区によつて異なるため、より広域的なハイマツの分布変化の調査が必要であろう。

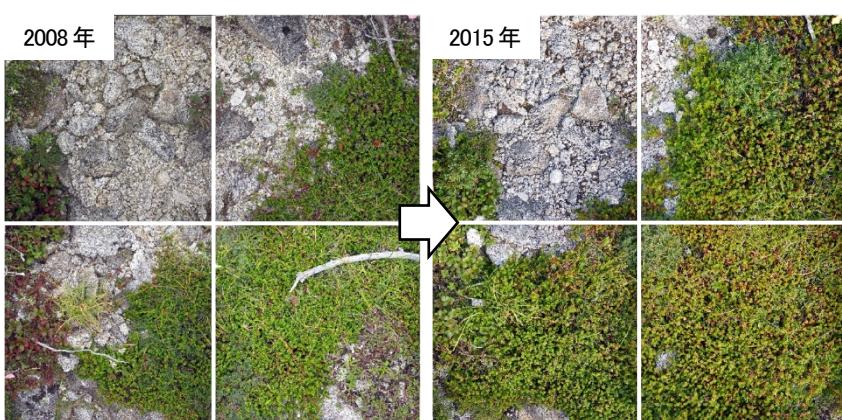


図3. 方形区の植生変化。正方形に整形した 0.5 m 四方の区画写真を 4 つ並べて、1 m 方形区を表した。顕著に増加しているのはガンコウラン。

が増え、弱い種が減少するのか等)が起こりえるのか注視していきたい。また出現数の変化やバラつきをよりよく説明できる環境要因の特定が、今後の温暖化影響を把握するうえでの重要な課題と言えるだろう。

（自然保護委員）

連載コラム

「ライチョウといつまでも」

自然保護委員 日吉 健治

皆さんにとって山登りの楽しみはなんですか。

目指すピーカに達した時の達成感や充実感、

そこから見ることのできる360度の絶景、さらには宿泊地で飲むお酒や下山後の温泉なども楽しみかもしれません。

人それぞれ楽しみがある中でおそらく誰でも心を奪われるのはその地でしか見る事の出来ない動植物との出会いではないでしょうか。中部山岳地帯の高山域で、更には運もなければ出会うことの出来ないライチョウもそんな心奪われる存在だと言えましょう。

しかし今、残念な事にライチョウは日本で最も絶滅の恐れがある生き物の一種になってしましました。

1980年代の調査では推定生息数が3000羽だったのが2000年代のものでは2000羽以下に激減しているとの報告があります。



一般に生息数が1000を切った脊椎動物種は個体数維持が難しくなり、絶滅を免れないと言われています。

そしてライチョウにもそのリミットが近づきつつあります。

私たちは山を愛するものとして、このかけがえのない日本の宝であるライチョウを守つていくことが必要ではないでしょうか。

このコラムはライチョウを絶滅から守る為皆さんにライチョウの事をもともと知つて頂き、どうすれば良いかと共に考えて行く事を目的として立ち上げました。

次回より、ライチョウという鳥の紹介から始まりライチョウの置かれている現状と課題、保護活動についてなど報告し、今後どう守つていけば良いのか考えていただきたいと思います。

このコラムを読んで下さる皆様、次回以降もどうぞ宜しくお願ひ致します。

【購読料のお願い】

●本紙を購読されている方は、今年度（四月～三月）の年間購読料として、1千円を「郵便振替用紙」または「郵券」でお送り頂きたくお願いいたします。

（郵便振替用紙を同封いたします）

【カンパのお願い】

購読者以外の方（理事、支部長、支部事務局長、自然保護協力委員、支部自然保護委員、贈呈者等）で送料等のカンパにご協力頂ける方は、「郵便振替」または「郵券」でお送り頂きたくお願いいたします。

●送り先

・郵便振替

00180-4-710688

加入者名 川口章子

・住所

〒274-0063

船橋市習志野台

4-43-1-102

川口章子

携帯トイレのすすめ

～公益社団法人日本山岳会 自然保護委員会からの提言～

環境汚染と水道用水

山のトイレ問題は登山愛好者の増加について、山の良好な環境保全を考える時、看過できない問題になってきています。

登山道から外れた藪などの物陰に入ると目につく白い紙。登山者の多い山では、登山道からでも目につくことがあります。見た目だけでなく、汚物は降水と共に河川に流入し、河川は汚染されていきます。大都市近郊の山々は水道の水源林となっていますので、人々に気付かれることなくそのまま流下して取水され、水道用水の浄化に負荷がかかることがあります。

山のトイレ

山中のトイレが必要であることは、誰でも理解しています。一次費用が工面できれば、トイレ建設は比較的容易に実現しますが、人里離れた山中にあるために管理・運用面で大きな問題が発生します。つまり、溜まった排泄物処理をどうするか、そしてその費用用。

最近は、溜める・流す、の両方を止めて、トイレベースのみを設け、持参した携帯トイレで用を足し、回収デポ箱に投入、あるいは各自で持ち帰るという山小屋もあります。これが一番簡便で実用的な案であると考えます。

携帯トイレの携行と携帯トイレの有用性

登山者は携帯トイレを登山の際の個人装備必需品として携行し、回収箱がない場合は持ち帰る、これを登山者のモラルとして定着させたいと思っています。

携帯トイレは、地震のような緊急時に街中でも自宅でも使えます。もし日常生活で自家のトイレが使えなくなったら、皆さんはどうしますか。この携帯トイレは即、役立つでしょう。

更に次の段階へ

多数の人々が携帯トイレを利用するようになり、その有用性が認識されれば、携帯トイレ自販機と使用後の回収箱の設置を登山口の自治体（市町村）に要望・働きかけることが容易になるのではないでしょうか。



NPO 法人日本ヒマラヤンアドベンチャートラスト作成缶バッジ

◇自然保護委員会の活動記録◇

〈一月度〉

報告・連絡事項

①山岳団体自然環境連絡会 1月31日(月)

*2018年3月11日(日) 第2回山岳自然環境セミナー・佐々木青少年オリンピックセンターで開催の企画。

②自然保護委員会 1月22日(月) 降雪により会議中止。

〈二月度〉

報告・連絡事項

①山岳団体自然環境連絡会 1月31日(月)

2018年3月11日(月) 第2回山岳自然セミナー開催企画。

②自然保護委員会 2月13日(火) 19時～

*『木の目草の芽』の印刷を外部発注の見積もりをとり2018年度予算申告をする。

*2018年度自然保護全国集会開催打ち合わせに実行委員長石川県能美市に行く。

*秋田県の熊問題について秋田支部佐々木民秀氏より支部担当の大船氏に新聞切り抜き記事が届き木の目草の芽に投稿依頼の案が出た。

*講演会開催・1月31日(水) 19時～

JACルーム 参加者30名
演題「アラスカ大自然の生活と環境」

協議事項

*全国集会の開催時間、テーマ、参加費、フレームスタディのバス代等の検討。

テマ案・高山植物の現状と未来

*木の目草の芽・132号の編集企画
“携帯トイレを携帯しよう”の呼びかけ文章を検討。

*日吉健治さん自然保護委員に就任。

〈三月度〉

報告・連絡事項

①理事会報告 2月14日(水)

*第16回障害者全国交流登山大会の支援。

日時・場所 10月6日～8日 高尾山

②山岳団体自然環境連絡会 2月19日(月)

*第2回山岳自然環境セミナー最終打ち合わせ。

③自然保護委員会 3月13日(火) 19時～

*120周年記念行事委員会 3月5日(火)

19時～JAC104号室で開催。出席。

*科学委員会・フォーラム“登山を楽しくする科学”3月10日(土) 立正大学品川キャンパスで開催。「ライチョウを守り育てよう」

の講演に参加、講師・環境省長野自然環境事務所 福田真氏。自然保護委員2名参加。

*第2回山岳自然環境セミナーに自然保護委員参加。シカ被害のポスター作製、展示。

協議事項

*アツモリソウ保護活動日程を6月23日JAC総会日のため6月17日(日)～18日(月)に変更。

協議事項

*2018年度自然保護全国集会について

・タイムスケジュール提案を承認。

・分科会は各支部で活用できるような内容にする。

・メインテーマは「白山をめぐる動植物の現状と未来」(案)。

*「木の目草の芽」にライチョウのコラム掲載の提案が日吉委員からあり掲載決定。

*自然保護委員会として携帯トイレの普及促進の提言を132号「木の目草の芽」に掲載。

〔編集後記〕自宅近くの小さな公園はソメイヨシノが散り、淡い緑で彩られ始めました。ぶらぶらと歩きながら芽吹いた葉っぱで樹種を確認してみると、ナラ、ケヤキ、トチノキ、ヤナギ、カツラ、ツツジ……。いなかの公園にしては随分と豊かな植栽だなど不思議に思っていたところ、本多静六氏の森づくりに習つた造園であることがわかりました。ほとんど人の姿もない町はずれの公園での思いがけない発見に、一層心はずむ春の訪れとなりました。

元川里美